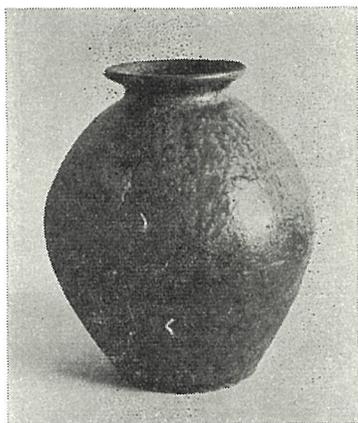


# 丹波の民芸

安田尚熙



① 室町時代の作品

私は同志社に学んだ六年間、京都に住み、当時柳兼子夫人に歌曲を教はっていましたが、民芸運動の開花期にあつて、活動を始めていた柳宗悦先生のお宅に伺い、各地から集まる民芸品に異常な興味を覚えました。昭和四年春マンドリン・クラブの一員として琉球に演奏旅行をして、向うの陶器を見て感激し、小遣の全部をはたいて陶器を買ったのが民芸愛好者としての発端であります。

民芸の意義については既に御承知でありましょうが、民衆的工芸の謂を柳先生らの初期発見指導者によつて民芸とされたのであつて、理論的に定められたものではありません。直観によつて美しいと感じたものを選び出したものであります。美の本道とされ美の帰すうとする「正しいもの」「健康なもの」を内容とする工芸のことです。また、これは時間を越えた正しい喜びをあたえる不変な新鮮さを持つものであり、常に生きている工芸であります。時代と共にものの外形は移り変わることはありますが健康という本質的なものを変えていないものであります。自然

の加護を沢山受けている品物は確かな性質を持つており、材料が不良であれば健全な存在とはいえません。このことは悪い体質で健康たりえないのと同じであります。材料が必然的に要求する技法がここで肝心な役割をつとめます。無理な技法や無駄な技巧や拙悪な技法は共に材料を殺してしまいます。物が美しくなるためには、自然や道徳の法則がよく働いていることがわかります。健全な肉体や健全な自然の賜であり、また道徳の賜であります。それには自然の加護を受けている材料が美の大きな要素となりますが、それに加えて自然や道徳の法則に従つた誠実な技術が加えられて、材料を一層高度に生かしているものなのであります。これらの条件になつた丹波の民芸に丹波布たんばのふと丹波焼があります。

丹波布は地元では「しまぬき」といい、京都では丹波布または佐治木綿とよばれているものであり、約十年前、柳宗悦、上村六郎、三宅忠一ら諸先生の指導後援により復興の実をあげ、昭和三十二年無形文化財に指定されました。

歴史的には延喜式に丹波に早くから染織の行なわれていたことがあり、徳川時代には丹波の「古布ふるふ」の土産として世間に知られております。

正徳二年（A D一七一）寺島良安著の「和漢三方図絵」の丹波国土産の条に「かりやす栗くり子古布ふるふ楡う灰はい」をあげてあり、この古布がその前身と想像され、享保頃（A D一七二六）の「万金産業袋」という本に「朽木しま」と並んで「丹波布」の名が初めて見えます。製法は綿から綿くり、じんき、糸ひき、これを煮て染る工程を経た木綿糸をふし、藍刈安榛栗シキミ、ヤマモモなどにより染色し、これらの手紡ぎの単糸を縦に用い、横に絹のつまみ糸を用いた手織であります。縦糸は同じで横に普通の絹糸を用いたものや、縦糸にときとして二子糸を用い横に絹糸を用いずつまみ糸に似せた綿糸を使ったものなどはいずれも丹波布の資格はありません。また深尾須磨子（丹波出身の詩人）作詩、島倉千代子Ⅱ唄う「赤いかすりの丹波布」は所謂通称丹波木綿という類であって、丹波布とは質の異なるものであります。丹波布は草木染ですから洗うたびに織にも色調にも佳い味が出てきます。

### 3

つぎは丹波焼でありますが、須恵器が絶えた直後、鎌倉期に始められ興行三メートル横一・九メートルの小さな穴窯で完全な址が三本峠にあります。南北朝室町期には窯が縦横一メートルずつ拡大されており、窯址は稲荷山にあります。何れも焼成には四〇〇時間位をかけて焼かれたことが想像され、自然釉の美観を呈した壺、かめが作られております。（写真①）

その後文祿の役後まもなく唐津をへて北鮮系竹割式半地上登窯（写真②）の築造に改められ（A D一六一一—一六一三）今日に到っております。数年前無形文化財に指定され、小さいながらも伝統的な前近代産業として連続と続いております。登窯の導入に伴い左廻りの蹴ロクロが用いられ、成形に著しい特徴となっており、主に雑器の生産を継承しておりますが、ときに茶人の指導による茶器の製作にも見るべきものがあります。

しかし丹波のよさは雑器にあります。その上、自然への順応に生まれた民窯である立杭焼などの民器が、作意された茶器よりも、も

つと茶器本来の性格をそなえております。例えば、桃山の慶長期の穴窯時代（第一期）に造られた摺鉢（雷盆）は水指、菓子鉢、さかな鉢など何れにも使用でき、自然釉の灰被



② 登窯（無形文化財）上立杭



③ 東 柴 形 手 桶 壺

の見事な景色、内面の線描など共に驚くべき器であります。利休をして今日あらしめなば、定めし御道具として取上げたであろうと思われます。

また、同期の片口も出来たときは単なる片口に生まれたのですが、力強いロクロ目、口作りの角度、美しい色調などが茶人に見出されて寛永頃（二六三〇年）以来大切に茶器として奉仕し、今日在るを得た民器でありま

す。

柳先生のいわれる清貧の美と申すべきでしょう。

江戸期に入って丹波窯は宝暦二年（二七五二年）の里窯に移るまで（第二期）とそれ以降（第三期）のものに大別されます。いわゆる含みの美、寂の美、貧の美、無の美を示す波さは何れの時代にもありますが、やはり深みのあるものは第二期に多く、ヴァラエティに富んでおります。（写真③）

第三期は京焼発達の影響に押されて苦難をたどり、それまでの強き素朴さから次第にせんさいやしやなものに移行しますが、またそれなりによさと美しさを持っております。

以上極めて簡単に歴史と特徴にふれましたが、私は古丹波は日本の焼物の最も奥深い峰の一つであるといいたいです。唐津はどうしても朝鮮風であり、織部は異国調であり、志野は絵高麗の流れを汲むといえましよう。和ものの和もの、真に日本のオリヂナルなものを示すものとして古丹波の占める位置は高いといわねばなりません。備前のように堅くなく、李朝のように冷くないこの風味は見直さるべきであります。

私は戦争中ベトナムでフランス人相手にドビュッシー、ラヴェル、ミローなど近代フランス音楽の味を通振ってやや得意で話したところ、相手の一人から万葉の詳しい話をされて戸惑いし、日頃日本の古典と伝統が身近にありながら等閑視していたことに大きな責任を感じました。爾来郷愁にも似たひたむきななつかしさを郷土の工芸に覚えたのであります。小さいながらも鎌倉以降連綿と続く民陶丹波は日本文学における古典の味のごとく、江戸文学の味のように、当時の人々の俗雅の生活と親しく共にして来た姿を残しております。

しかも日本の工芸のうち、画はフランスに彫刻はイタリーに勝るとはいえませんが、ただ陶器のみが日本の個性によって世界にはこるべきどこにも負けない独自の存在であることは自他共に許すところでありますが、その日本の陶器中、真にオリヂナル日本の性格を具えるもの丹波も許されていい窯であることをここに強調して今まで不遇であった丹波の民器のために深い理解の眼を開いて頂くことを期待いたします。

（昭和五年大経卒・奥丹波民芸協団理事長）